

西安市と陝西農村の変貌

西安市与陝西農村的變貌

石原 潤・趙 榮・秋山元秀・小島泰雄編

奈良大学文学部地理学科

目 次

序言

石原 潤（奈良大学）…………… 1

西安市现代城市空间结构演化及未来发展

赵 荣・李 连璞（西北大学）…………… 3

西安におけるモザイク状の都市化

小野寺 淳（横浜市立大学）…………… 15

西安市城中村问题及改造探讨

刘 军民（西北大学）…………… 35

西安市街地の城中村

秋山 元秀（滋賀大学）…………… 45

西安入境游客消费结构及旅游产业部门竞争力研究

李 瑛（西北大学）…………… 55

歴史文化テーマパーク化する都市

松村 嘉久（阪南大学）…………… 66

西安市における野菜の流通システム

石原 潤（奈良大学）…………… 85

中国西部高技术企业技术创新能力研究

赵 宇鸣（西北大学）…………… 104

西部县域经济发展中第三部门的功能优势及制度障碍

余 洁（西北大学）…………… 119

陝西農村の地域性

小島 泰雄（神戸市外国語大学）…………… 131

韩城花椒产业持续发展的思考

高 敏芳（渭南师范学院）…………… 148

韓城市における花サンショウ栽培の特徴と変容

高橋 健太郎（駒澤大学）…………… 155

序 言

石原 潤（奈良大学）

本書は日中共同研究「中国西北地方の改革開放および西部開発の進展に伴う生活空間の変容」の第1冊目の調査報告書である。

本研究の目的は、1978年以後の改革開放政策下において、とりわけ近年の西部開発の進展の下にあって、中国西北部の都市及び農村がどのような発展をとげ、それが住民の生産・消費の諸活動にどのような変化をもたらしているかを明らかにすることにある。

近年の中国は著しい経済発展を成し遂げているが、それは「東部」沿海部を中心としたものであり、最内陸部のいわゆる「西部」は発展から取り残され勝ちで、両者の間に著しい地域格差が生じている。このため中国政府は、この較差を是正すべく「西部大開発」を最重点戦略の一つと見なしている。

本研究の日本側グループは、従前、西部の中でも湿潤気候に属する西南部の四川省について、その変容の実態を3冊の報告書によって明らかにしてきた。

これに対して同グループは、今後、西部の中でも乾燥気候下に属する西北部に対象地域を移して、その変貌の実状を明らかにしようと考えている。今回の報告は、その第1回目として、西北部のいわば入り口に当たる陝西省をフィールドとしたものである。当省は乾燥した黄土高原を広範に含むと共に、古都西安が位置し古くから開けた渭水の盆地をも含んでいる。本報告ではとりわけ、省都として、また西北部開発の拠点として変貌の著しい西安市と、黄土高原東部韓村市の農村地域とに焦点を当てている。

本報告書を一読された読者は、市場経済化の波や西部大開発の影響が、古都西安や黄土高原の村をも、大きく変容させつつあることを理解されよう。本報告書が、西部大開発を進めようとしている中国の政策担当者、あるいはそれを理解ないし援助しようとしている日本の関係者に、いくばくかの情報提供の役割をはたし得たならば、われわれの望外の喜びとするところである。

本書のための現地調査は、2005年8月5日から23日の間、以下のメ

ンバーによって実施された。

日本側メンバー

石原 潤 奈良大学文学部
秋山元秀 滋賀大学教育学部
小島泰雄 神戸市外国語大学外国学研究所
小野寺淳 横浜市立大学国際文化学部
松村嘉久 阪南大学国際コミュニケーション学部

中国側メンバー

趙 榮 陝西省文物局・西北大学城市与資源学系
高 敏芳 渭南師範学院政治経済系
劉 軍民 西北大学城市与資源学系
趙 宇鳴 西北大学経済管理学院
李 瑛 西北大学旅游管理系
余 潔 西北大学経済管理学院

本書は、以上の共同調査に基づき、資料の一部を共有しながらも、各自がテーマを分担して、分析・考察・執筆を行った諸論文からなっている。

本共同研究は、財政的には、日本学術振興会の 2005 年度科学研究費基盤研究（A）「中国西北地方の改革開放および西部開発の進展に伴う生活空間の変容」（課題番号：17251010、研究代表者：石原 潤）によって全面的に支えられたものである。記して感謝の意を表したい。

調査にあたっては、西北大学城市与環境系の揚新軍氏、同公共管理学院の朱海霞氏にもお世話になった。さらに、西北大学外国語学院の張艶萍氏は通訳として、同大学院の康俊香さんは調査補助者として、協力をいただいた。これらの人々に対して、深甚の謝意を表したい。日中関係が微妙であった時期だけに、調査には困難が伴ったが、一応の成果を挙げる事が出来たのは幸いであった。

歴史文化テーマパーク化する都市

—古都・西安の観光開発と空間変容—

松村 嘉久

(阪南大学国際コミュニケーション学部・助教授)

1. はじめに

ハイデンは『場所の力』のなかで、「場所の力。それはごく普通の都市のランドスケープのなかに秘められた力であり、共有された土地のなかに共有された時間を封じ込め、市民が持つ社会の記憶を育む力である。」¹と述べている。また同著では、アイデンティティと人間の記憶との不可分な関係が指摘され、その記憶には個人的な記憶のみならず集団的あるいは社会的な記憶も含まれ、都市景観はそうした社会の記憶を収める蔵である、とも論じられている。つまり、ハイデンは、都市景観・アイデンティティ・個人的あるいは社会的記憶という三者間の相互作用が「場所の力」と深く関連すると強調したわけである。ところが、ハイデンは同著を通じて、アイデンティティの主体が何であるのかを明示せずに議論を展開し、様々な背景からなされる主張が交錯し闘争が繰り広げられるなかで、社会的空間が生産されていくと論じている。一方で、一般的な議論のなかでは、市民やパブリックという言葉が頻繁に使用されているので、日常のなかで身体性を持って都市生活を営む市民レベルのそれが強く意識されているとも推察できる。総じて、ハイデンの議論は、市民の個人的・集団的記憶が都市景観に分かち難く埋め込まれており、それを掘り起こして呼び覚ますことで場所の力を高めようとする一種の市民社会運動を志向している。

しかしながら、西安のような国民国家という幻想の核となるような古都、海外からの旅行者を広く魅惑する国際観光都市の場合、ハイデンのいうアイデンティティのなかに、ナショナルあるいはインターナショナルなレベルのものが入り込み、「国内観光」や「国際観光」の振興といった観点から、「見せる」という営為を強く意識するなかで、既述した三者

¹ ドロレス・ハイデン『場所の力—パブリック・ヒストリーとしての都市景観—』、学芸出版社、2002年、33頁。

間の相互作用と場所の力との関連およびそれらのバランスは大きく変容することとなる。ナショナルなレベルのアイデンティティは、「幻想あるいは物語」として共有された土地や時間のなかで、集団的記憶が育まれることによって強化されていく。歴史的蓄積の分厚い中国の場合、ナショナルなレベルのアイデンティティを喚起させる「幻想あるいは物語」は、とても古い時代にまでさかのぼられ、それらは現代の都市景観のなかでは、わずかに痕跡をとどめるに過ぎない。ナショナルなアイデンティティが自明のものとして存在するのか否かは別問題として、中国人の多くがそれを古都・西安で生起してきた歴史文化のなかに求め、現代の都市景観のなかでそれを確認するため探し求める状況が存在する。しかしながら、その源泉は余りにも古く、それが都市空間に刻み込んだ痕跡は、余りにも長い年月のなかで朽ち果てている現状がもう一方で存在する。

ナショナルなレベルで集団的記憶を確認しようとする人々は、古都・西安という都市空間のなか、「幻想あるいは物語」を追い求める形で、ごく短い滞在期間のもと、そのナショナルなアイデンティティを確認しようとする。そこで重要視されるのは、歴史文化のオーセンティシティよりも、確認するという営為自体であり、短時間で理解できるように、わかり易く可視化されスペクタクル化されていることであろう。このようなまなざしのもと、都市景観に刻み込まれた集団的記憶の痕跡が、まさに痕跡としてのみ残存している場合、ナショナルなアイデンティティを確認しようとする者は、その脳裏に刻み込まれた色鮮やかな「幻想あるいは物語」と比して落胆するであろう。インターナショナルなまなざしも同様であり、彼・彼女らが持つイメージの鮮やかさと都市景観に刻み込まれた痕跡との間のギャップは、落胆へとつながる。

現代中国の都市空間は、まるで3倍速の早送りビデオを見るような勢いで急速に変容しつつある。中国が「世界の工場」へと成長する過程において、とりわけ国家事業として西部大開発が唱導されるに伴い、莫大な資本が内陸部の都市建設へと還流し始めた。国際的な都市間競争のなかで、さらには90年代以降の国内的な都市間競争のなかで、現代中国の諸都市は競争に勝ち抜く何かを求めて、その開発にあたっては、経済的・産業的には合理性を追求し、文化的には差異化を促進してきた。このようなポストモダンの状況下で、とりわけ、集客や観光という文脈と絡んで、中国の諸都市は自らの文化的内実を見据えて他者との差異を強調する方向で発展してきた。古都・西安は西部大開発の拠点都市のひとつであり、中国のなかでも図抜けて分厚い歴史文化的な蓄積を持つ観光都

市・消費都市でもある。分厚い歴史文化の蓄積は着実に地表に刻み込まれてきた。しかしながら、人々ナショナルなアイデンティティを喚起する「幻想あるいは物語」が、90年代初めからの中華ナショナリズムの高まりのなかで再生産され鮮やかさを増したのに対して、地表に刻み込まれた歴史文化の痕跡は、余りにも色褪せ地味であった。この状況と内陸部拠点都市への資本投下が絡み合った時、刻み込まれた痕跡を歴史遺産として保存するという営為の一方で、そうした痕跡を核として、「幻想あるいは物語」をよりわかり易く見せるよう、可視化しスペクタクル化する営為が急速に展開してききた。

いわば、都市空間の歴史文化テーマパーク化といった現象である。換言するならば、古都・西安で現在生起している現象は、ルフェーブのいう「空間の表象」がナショナルなレベルで明確に構想されるなか、「空間的实践」がそれらを可視化・スペクタクル化する方向で再編され、「表象の空間」が圧迫されている状況に他ならない。西安市民が自らの身体性で持つて経験する生活空間は、中国国内観光客が古都・西安に探し求める「幻想あるいは物語」のなかで、どのように変容してきているのか。本稿では、2005年8月14日から23日まで西安で行った現地調査をもとに、歴史文化テーマパーク化する古都・西安の諸相を紹介しつつ、観光開発と空間変容の相互作用を検討したい。

2. 古都・西安の観光事情

陝西省を訪問する国際観光客数は、年々着実に増加してきているものの、陝西省観光の全国的な地位は低下してきた。陝西省を訪問する国際観光客数の全国順位は、80年代ならば確実にトップ5の一角を占めていたが、92年に全国第8位、97年に全国第11位へと順位を下げた²。80年代の中国国際観光は対外開放都市の数が少なかったため、国際観光客が訪問できる都市そのものが少なく、西安はそのなかで最も魅力的な都市のひとつであった。ところが、90年代から中国各地各省で対外開放が進展して国際観光振興が本格化するに伴って、その相対的地位は徐々に低下してきた。2005年現在の国際観光客数は全国第13位の年間92.8万人回、国際観光収入は全国第11位の年間4.5億米ドルを記録している。陝西省の国際観光において、ゲートウェイ都市である西安市の訪問は欠

² 省レベル・都市レベルの観光関連の統計データは、特に断りのない限り、国家旅游局のホームページ「中国旅游网」(<http://www.cnta.com/>)から引用した。

かせない。2005年に西安市を訪問した国際観光客は陝西省全体の83.5%に相当する77.6万人回に達し、外貨収入ベースでは省全体の91.7%に相当する4.1億米ドルを西安市が稼いでいる。国際観光において、陝西省における西安への集中度は、他省の省都と比べてもかなり高く、西安は突出した存在であると言える。

国内観光に関しては、陝西省全体で2004年に4,150万人回の国内観光客が訪問しており、国内観光収入は185億元に達した³。同年、西安市への国内観光客は2,084万人回（省全体の50.2%）、国内観光収入は127億元（省全体の68.6%）であり⁴、国際観光と比するならば、国内観光の方は西安への集中の度合いが低い。陝西省には、西安以外に中国革命の聖地である延安などの観光地があるが、これらは一部の国際観光客からの人気を集めるものの、基本的には国内観光客が訪問するため、このような結果になったと考えられる。なお、ここでは特に、国内観光は国際観光よりも人数ベースで二桁、収入ベースで一桁高いという事実に注目したい。これは、陝西省の観光をめぐって、国際観光客よりも国内観光客のまなざしが意識されることを意味する。古都・西安における都市空間の変容や歴史文化のスペクタクル化においても、この事実は重要な意味を持つ。

さて、西安では、商業貿易と観光の振興を強く意識した『西安市2004-2020都市総体計画』が発表されている⁵。この都市計画と関連して観光振興のマスタープラン『西安市旅游發展総体計画（2005-2020）』（Master Plan of Tourism Development for Xian City）も策定されている⁶。西安観光の中期發展計画としては、六つの優先観光發展地区が2D4Pという形でまとめられている。ここでの2Dは、the Ancient Capital of Tang DynastyとWaterside Recreation Districtであり、四つの公園（4P）として、兵馬俑及秦始皇帝陵国家遺跡公園・唐華清宮御湯国家遺跡公園・漢長安城国家遺跡公園・西安秦嶺国家游憩公園が挙げられた。とりわけ、西安の市街地再開発と関連が深いのは、the Ancient Capital of Tang

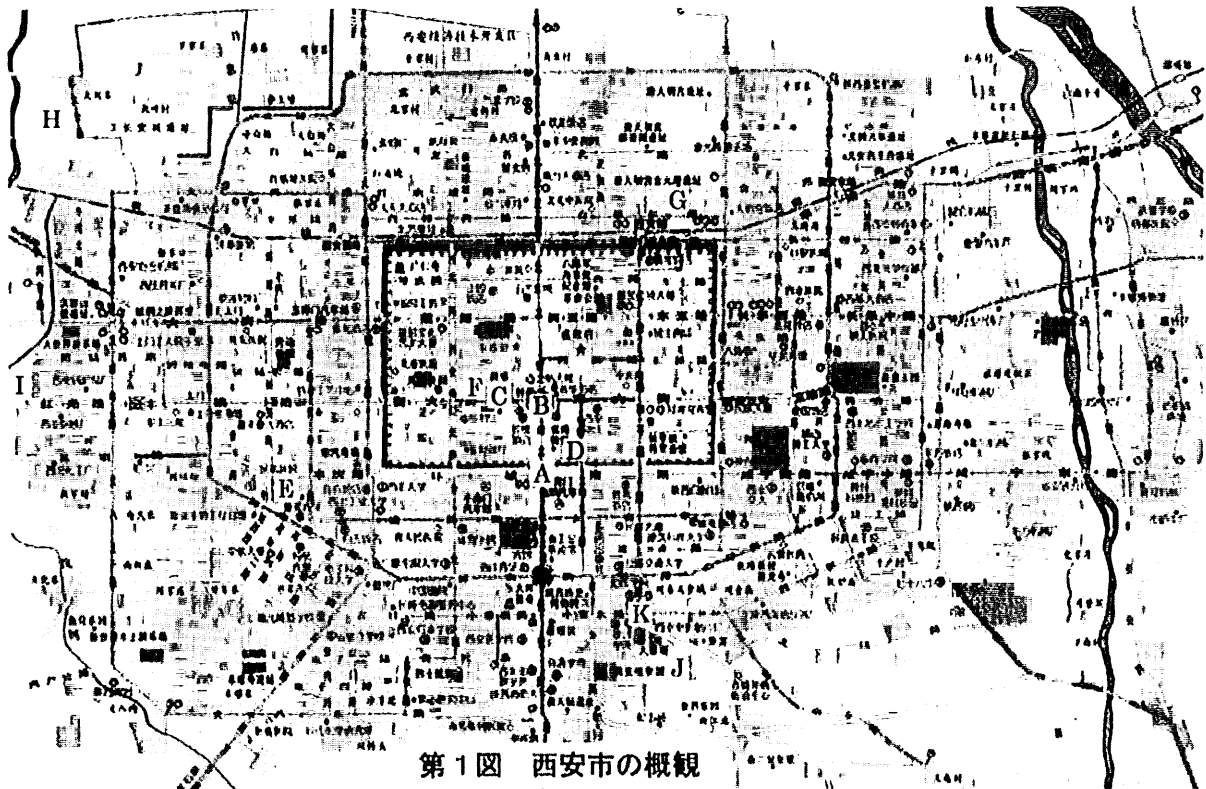
³ 2005年1月18日付け『陝西日報』記事「省旅游局:我省去年旅游总收入214亿元」, 陝西省政府公衆信息网より引用。

⁴ 2005年5月3日付けのネット記事「2004年西安市旅游各项指标全面超额完成」, 西安旅游网 (<http://www.xian-tourism.com/>) より引用。

⁵ 2004年12月20日付け『陝西晚报』記事「西安公示第四次总体规划 16年内古城大变样」, http://www.xawb.com/gb/city/2004-12/20/content_426463.htm より引用。

⁶ 西安市旅游局・北京大学旅游研究与計画中心・北京大地風景旅游景觀計画設計研究院『西安市旅游發展総体計画（2005-2020）』（Master Plan of Tourism Development for Xian City）2004年11月。

Dynasty（唐都長安旅游区）の発展計画であり，ここには本稿でも言及する大唐西市遺跡回復工程・西大街総合改造工程・含元殿与御道工程・含光門修復工程・長安芙蓉園などが含まれており，唐大極宮遺跡区総合保護工程・唐大明宮遺跡総合保護工程や，唐代の城壁外郭を修復再現する唐都長安外郭工程なども挙げられている。西部大開発の勢いに乗じて，古都・西安は，唐の都・長安へとスペクタクル化されようとしている。



3. 古都・西安の市街地再開発と観光に向けたスペクタクル化

(1) 城壁の修復とスペクタクル化

現代の西安市市街地を囲む城壁は、隋・唐代に建造された土塁をもとに、明代洪武年間（1374年から1378年）に築かれ、清代から現代にかけて修復・保存されてきたものである。後述するように、漢代の長安城跡はこの城壁の外側の北西部一帯に広がり、長安の都が最も繁栄した唐代の城壁ともことなる。現在の西安城壁は、東西4,256メートル・南北2,708メートルの長方形で、旧市街地を切れ間なく囲んでおり、その周囲総延長は13.7キロである。1987年、私が西安を訪問した際、西安城壁は所々で修復あるいは建設していた。現在、どの部分が修復された箇所か、どの部分が新たに建設された箇所なのか、目視での観察では判断できない状態にある。これまで過去に何度も城壁の修復作業は行われてきたが、解放後に破損が急速に進むなか、西安環城建設委員会のもとで実施された1983年からの城壁の保護・修復事業が最近のものである。1980年代の中国では、歴史遺産の保護を優先するのか、経済発展を優先するのかで議論が二分されていたが、古都・西安では、明清期城壁の保護・修復へと向かった。財政難で十分な資金が得られないなか行われた保護・修復では、西安市民の多くがレンガ運びなどのボランティア労働に参加して、城壁保護の支援活動を展開した。そのため、西安市民のなかには、この城壁に格別な愛着を持つ人も少なくなく、集団の記憶を抱くひとつの都市景観となっている。

西安城壁は2002年8月から東西南北の各門が観光客に開放され、城壁の上を一周する観光ができるようになった。05年夏現在、安定門（西門）が修復中であつたので、永寧門（南門、第1図A地点）が観光活動の拠点となつていた。城壁の上へはどの門からでも登れるが、入場料として40元（1元＝約15円）とられる。南門からは遊覧観光電気自動車が出ており、一人当たり50円で城壁を一周してくれる（写真1参照）。南門にはレンタサイクルもあり、200元のデポジットを出すと一時間当たり10円で借りられる。南門では2005年夏から、一人当たり30元の参加料を徴収して、「倣古開城式」なるものも行われていた。この儀式は遠来の客を長安の都城内に迎え入れるものを復元したものであり、一応の歴史考証は行っているものの観光客向けに脚色されているとのことであつた。なお、城壁への入場料は05年6月までは10元（現在40元）であつたが、いずれにしても、西安市民が日常生活での憩いの場として登るには、高すぎる価格である。現場での観察でも、城壁に登るのは観光客だけであり、一般の西安市民は城壁の外周に整備された堀や公園を散策するに

留まっていた。これは日常的な都市景観が観光客向けに整備されスペクタクル化され、入場料が発生するに伴って、一般市民の日常生活がそこから排除される一例と指摘できよう。

さて、この西安城壁は 1987 年以來、過去三回も世界文化遺産への登録申請を試みてきたが、中国の世界遺産予備リストでの順位付けも低く、世界文化遺産登録は達成されていない。過去の登録申請で最大の障害となったのは、城壁の周囲の都市景観が整備されておらず、とりわけ現代高層建築が城壁からの都市景観のなかに混在していることであった。西安城壁のすぐ内側には、高層建築こそまばらなもののスラム化した市街地が目立った。一方で、城壁外側には高層建築が立ち並ぶ現代的な都市景観が展開している。西安では 2002 年に『西安歴史文化名城保護条例』が制定され、そのなかで城壁内側の土地利用の用途制限や高度規制などが盛り込まれた¹。逆説的にいうならば、西安は 1980 年代に国家級歴史文化名城に指定されていたものの、2002 年までまともな規制が無いまま捨て置かれてきたのである。

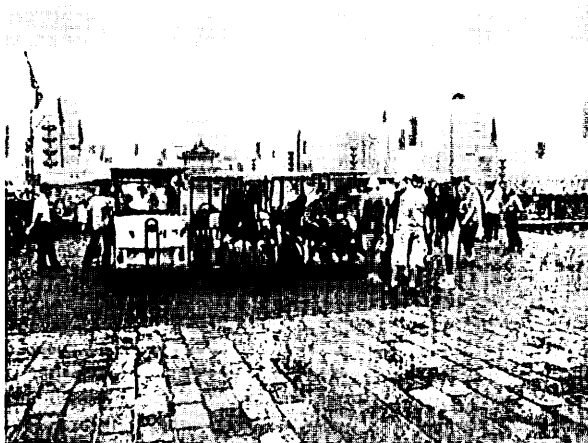


写真 1 南門発の城壁観光

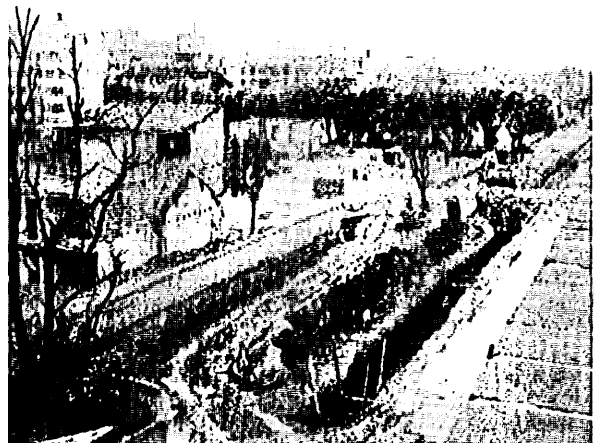


写真 2 城壁から見た城内

陝西省は四川省などと比較するなら、城内観光資源の世界遺産登録に積極的ではないとの印象を受けるが、中国国内の世界遺産登録予備リストには、漢長安城・唐大明宮・西安碑林・西安城壁の四ヶ所が挙げられている。しかしながら、このうちの漢長安城は単独での登録申請ではなく、「シルクロード」のひとつの構成要素として盛り込まれており、唐大明宮や西安碑林も、いまひとつ迫力が欠けるとの印象が拭えない。現在、

¹ 「西安历史文化名城保护条例」（2002年2月6日西安市第十二届人民代表大会常务委员会第三十次会议通过，2002年6月7日陕西省第九届人民代表大会常务委员会第三十次会议批准）より。

中国の古都として世界遺産への登録申請に向けて努力しているのは蘇州と南京であり、西安は古都としての風貌がすでに破壊されているとの評価が大勢を占め、「明清期の城壁群」として蘇州・南京などとともに申請するのが、実現性のある唯一の道だとの見方もある²。一方で、2005年から2007年にかけての3年間にわたり、都市景観の品位を高め観光の発展に資する目的で、城壁景観地区の改造に4.2億元を投資する計画もなされている³。2005年夏の現地調査で城壁を半日かけて一周したが、城壁内側の所々で、遊歩道付きの道路を建設する光景やスラム化した市街地をクリアランスする過程を観察できた(写真2参照)。城壁内側の生活空間も、ここ数年のうちに大きく変容するものと推察される。

(2) 市街地再開発と倣古開発の諸相

城壁の修復と同時に、古都・西安の観光に向けたスペクタクル化で重視されているのが、北門と南門を繋ぐ南北軸である北大街・南大街、東門と西門を繋ぐ東西軸である東大街・西大街、およびその両軸が交差する城内の中心部(鐘楼と鼓楼)である。鐘楼(1380年建設、第1図B地点)と鼓楼(1384年建設、第1図C地点)の間には、かつて老朽化した低層の住宅街と商業施設が広がり、その一部は出稼ぎ労働者たちが集まり住みスラム化していた。観光客が必ず訪れる鐘楼・鼓楼周辺の市街地再開発は、1995年末から鐘鼓楼広場の建設という形で着手され、1998年に完成した(写真3参照)。鼓楼広場は地上が公園で、地下は三階まで掘り込んだモダンなショッピングセンターになっている。鐘楼・鼓楼の周辺では、鐘楼(約40メートル)よりも高い建造物の建設が禁じられており、都市景観の整備に配慮がなされている。2005年夏現在、鼓楼西広場が新たに整備されている最中であった。

鐘楼・鼓楼からの東西軸・南北軸では、特に観光拠点である南門と西門へと延びる南大街と西大街において、倣古開発という古都・西安の都市景観に配慮した市街地整備がなされている。倣古開発は文字通り「古きに倣う」開発であり、新しく建造物を建設したり、既存建造物を改装したりする際、そのデザインや外観を古い時代のものを意識して行い、街並みや街路に往時の時代性を再現する再開発の方法である。西大街を管轄する蓮湖区は、2001年から「唐文化」をテーマとした西大街の整備に乗り出した。西大街の整備では、道路幅を拡張する際にセットバック

² 2003年9月12日付け『華商報』記事「西安城牆第三次申遺勝算几成？」より。

³ 2005年2月24日付け『西安晚報』記事「我市將斥資4.2億元改造城牆景区 促進旅遊業發展」より。

をかけて、電線を埋設して歩道を整備する一方で、新たに建造する建物の道路に面する側の外観は、唐代風のものにしなければならないと定めた。そのため、西大街では最近にできた現代建築ほど、古式ゆかしい外観を呈しているという奇妙な現象が観察できる（写真4参照）。

南大街の南端、南門近くに立地する碑林博物館界限でも倣古開発が行われ、2005年5月に書院門歴史文化散歩道という観光客向けの遊歩道が完成した（写真5および第1図D地点）。南門からその東側の文昌門に至る城壁の内側には、宝慶寺華塔・関中書院・碑林博物館・孔廟といった史跡が連続的に分布し、観光客向けに書画骨董・文具四宝などを販売する書院門古文化街が90年代初頭に建設された。ところが、このように点在する観光アトラクションと、それらをつなぐ街路や周辺の環境とが調和していなかったため、碑林区政府が430万元を投資して、道路に面した建造物の外観を唐代風の意匠に改装し、書院門歴史文化散歩道を整備した。倣古開発に伴う周辺環境の整備では、老朽化した低層住宅街がクリアランスされ、そこに唐代風の商店街が新たに創造されつつあり、南門での倣古開城式と合わせて新たな観光名所になると期待されている（写真6参照）。こうした商店街の店主や従業員は、そのほとんどが地元西安人ではなく、安徽省ほか他所から来た人々であり、クリアランスされる前の低層住宅街の住民は、他所へと引っ越したとのことであった。

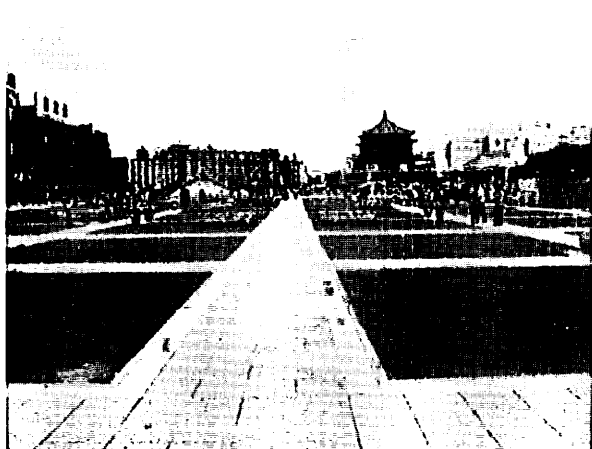


写真3 鐘鼓楼広場

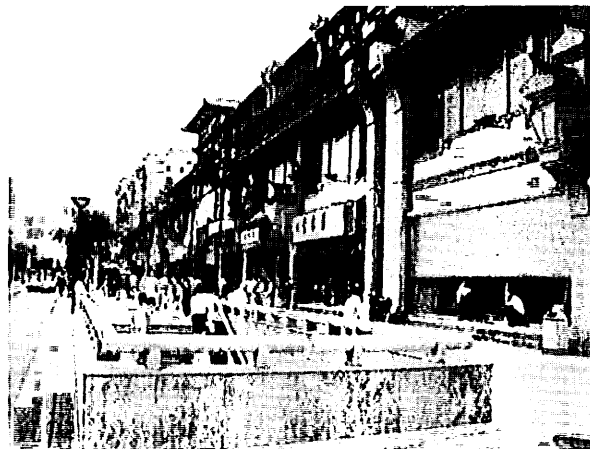


写真4 西大街の倣古開発

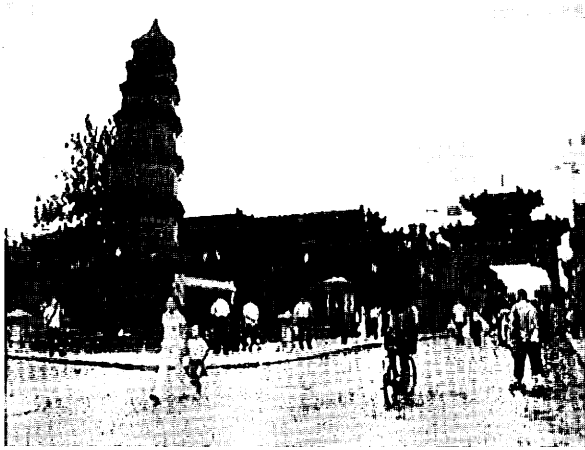


写真 5 書院門歴史文化散歩道

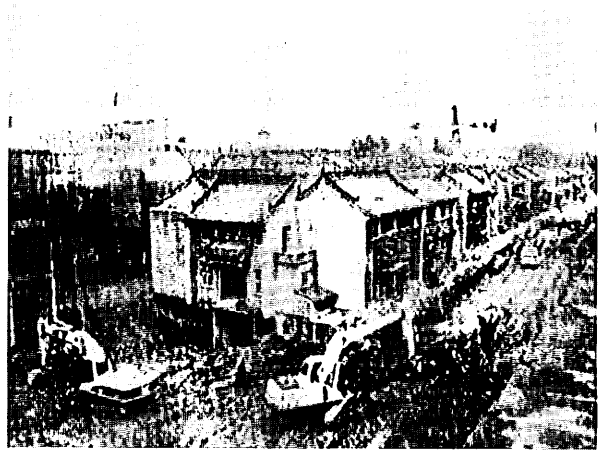


写真 6 建設中の唐代風商店街

西安城外の西側では、唐代にシルクロード交易で栄えた「大唐西市」を倣古開発で「復興」する計画が着々と進行しており、これは西安市の「復興皇城」計画の一環に位置付けられている（第 1 図 E 地点）。総建築面積で 41 万平方キロ、総投資 12.8 億元におよぶ巨大プロジェクトは、唐代に西市が実際に存在した遺跡の上に、観光・商業貿易・レストラン・娯楽などが一体化した大型観光施設を建設しようとするものである⁴。2005 年夏現在、低層住宅街と電子部品市場などが存在した広大な建設予定地は、立退きと撤去をほぼ終え、まさに着工されるところであった。このプロジェクトを「大唐西市遺跡回復改造項目」と呼ぶ報道もあり⁵、倣古開発による一種のテーマパーク建設が、歴史的な遺跡の復元と捉えられることを如実に示している。

⁴ 2004 年 12 月 30 日付け『陝西日報』記事「大唐西市规划设计方案通过评审」より。

⁵ 2005 年 3 月 10 日付け『西安晚报』記事「大唐西市遗址恢复改造项目正式动迁 开国内先河」より。

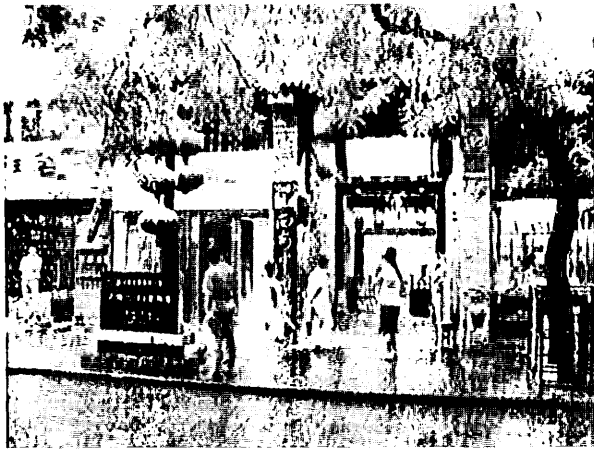


写真 7 保存対象の四合院住宅



写真 8 撤去への異議申し立て

（3）城隍廟の修復とスラムクリアランス

鼓楼以西の西大街の北側一帯は、西安市内で回族が集住している地域であり、ガイドブックにも掲載されている化覺巷の清真大寺を始め、大小合わせて10のモスクが点在するなか、総人口のほぼ三分の一を占める回族が多数派民族の漢族以上に強固なコミュニティを築いて居住している。道路が基盤の目のように整備されている西安城内にあって、この一帯は比較的狭隘な街路が複雑に展開している。モスクとともに古い建造物や街並みが残っているため、西安市から「西安回民歴史街区」に指定され、ノルウェイが保護資金を拠出する協定を中国側と締結して、1997年から特色のある三つの四合院建築の保護に乗り出している（写真7参照）。しかしながら同時に、老朽化した建造物と狭隘な街路にどう対処するのかは、比較的強固な回族コミュニティの間隙をぬって、出稼ぎに来た外来労働者たちもこの一帯に集まり住むようになるに伴い、敏感な民族問題も絡む旧市街地の再開発問題として立ち現れてきた。鼓楼から観光対象となっている清真大寺への導入路を中心に、道路拡張と電線埋設などの景観整備が進展してきたが、セットバックや立退きに異議申し立てする住民も少なくない（写真8参照）。とりわけ回族住民が絡む場合は、西安市政府なども他所と比較するなら極めて慎重に対応している。

一方、西大街に面する回族集住地区の一角に、城隍廟とその門前の城隍廟商場があるが、城隍廟の著しい老朽化に伴う建替えを契機に、その周辺で大規模なスラムクリアランスが展開していた（第1図F地点）。2001年に国家レベルの重点文物保護単位に指定された城隍廟の周辺は、1980年代初頭から个体商業戸が門前に集い、80年代半ばには面白い中国土産を購入できる新たな商業集積地として、日本のガイドブックにも紹介されるような場所であった（写真9参照）。老朽化した旧市街地でも

あった城隍廟周辺は、その後、外来の商売人が集まり住む一種の「問題地域」となり、城隍廟本来の品格を傷つける存在として、また都市再開発の最重要対象地域のひとつとして認識されるようになった（写真 10 参照）。鐘楼・鼓楼からほど近く西大街に面する城隍廟界限の自生的な変化は、西安観光のイメージを損ないかねない問題としても把握され、観光客向けに再建して成功した上海城隍廟をモデルとして、2002年9月に城隍廟そのものを保護・開発するとともに、その周辺を総合的に改造する方針が打ち出された。

城隍廟自体は修復というよりも倣古開発で新たに建築され、その門前の商場は全て撤去した後に、倣古開発で、観光・廟会・購買・娯楽が一体となった「城隍廟廟前広場」として再生する計画である。城隍廟は、鐘楼・鼓楼と連動する西安市の重点観光地区として、生まれ変わろうとしている。廟前広場の建設で撤去対象となるのは、1.2万平方キロ・321世帯におよび、撤去業務は2005年7月から始まり9月に全てを終了して、同年10月から廟前広場を着工して12月に完成するという慌しい計画が立てられていた⁶。現地調査では、『城隍廟廟前広場改造工程』の公告が、05年7月27日付けで「西安市城市房屋拆遷安置管理弁公室」名義で張り出され、西安市基礎設施建設投資總公司を合法的な撤去機関として、9月27日までに立ち退くようとの趣旨が示されていた。城隍廟商場やその周辺では、「○拆」というサインを頻繁に目にした。この「○拆」マークは、型紙の上から黒字あるいは赤字のラッカーで塗りたくったもので、城隍廟周辺のクリアランスだけでなく、城壁内側のスラムクリアランスほか、西安市の旧市街地や郊外でも頻繁に目にしたことを指摘しておきたい。



写真 9 城隍廟商場の外観



写真 10 城隍廟周辺のスラム

⁶ 2005年7月29日付け『三秦都市报』記事「西安城隍廟廟前广场改造工程启动」より。

4. 西安郊外の観光開発と空間変容

(1) 大明含元殿の整備とスラムクリアランス

西安城外の北東から二環路の内側にかけて、唐代都城の遺跡である唐大明宮遺跡・唐大明宮麒麟殿遺跡・唐大明宮含元殿遺跡などが点在する。唐大明宮は唐代長安城の皇宮であり、唐代歴代皇帝たちの官邸街であった。663年に建設された含元殿は大明宮の正殿のひとつであり、毎年元旦に皇帝が諸外国や周辺諸民族の代表を集めて謁見を行う場であり、唐代長安の国際交流の最前線であった（第1図G地点）。含元殿は国家重点文物保護單位に指定されたものの、解放後に本格的な保護修復事業は行われず、事実上は荒れ果てるがまま放置されていた。この含元殿遺跡の保護修復事業においては、1995年に中国・日本・ユネスコの三者が協議して、日本側がユネスコ文化遺産保存日本信託基金から世界文化遺産保護費として235万ドルを無償供与することが決まり、遺跡保護のためのマスタープランの作成、建築基壇部分の修復、正殿前広場の整備などで日本政府が協力している¹。2005年夏現在、大明宮含元殿基壇の修復事業はすでに完了しており、日本の無償文化援助2.8億円を得て2004年4月に竣工した大明宮含元殿遺跡館が、2005年5月から一般公開され、遺跡そのものとともに、西安の新たな観光スポットになることが強く期待されていた（写真11参照）。2005年10月に西安にて、世界文化遺産登録で重要な役割を果たすイコモス（International Council of Monuments and Sites）の国際会議が行われたが、既述した書院門歴史文化散歩道や南門での倣古開城式、含元殿の整備などは、この会議に間に合わせるよう急がれ、会議の参加者たちに古都・西安の歴史文化がアピールされた模様である。

さて、大明宮含元殿自体は遺跡としての価値こそ高いが、国内外から訪問する観光客を満足させるに十分なわかりやすさは備えていない。時間も知識も限られた観光客たちの歴史的想像力や地理的想像力には限界があり、修復された基壇部分のみから、往時の唐大明宮を偲ぶにも限界がある。このような場合、中国では歴史遺跡をひとつの核として、その周辺の景観を整備してスペクタクル化することで、観光客の歴史的想像力や地理的想像力を喚起する装置とすることが多い。含元殿も例外ではなく、その保護修復事業のなかには、正殿前広場の整備と御道の建設も

¹ 外務省ホームページ

（http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/culture/kyoryoku/yukei/yukei_1.html）より。

組み込まれていた。含元殿遺跡から鉄道の西安站にかけての一带は、国共内戦時に河北省から逃げてきた人々が数多く住み着いた所であり、1990年代半ば以降は、河北省以外からの出稼ぎ労働者たちもそこに加わり、劣悪な低層住宅街が広範囲に展開するスラムと化していた。含元殿の正殿前広場と御道の整備は、西安市でも最大規模の事実上のスラムクリアランスとして機能していた。撤去対象となったのは含元殿遺跡の南側一帯、東西400メートル、南北630メートルにおよぶ地域で、この地域だけで3,013世帯約1.1万人が立ち退きの対象となった²。撤去された地域には、御道と丹鳳門が復元され、倣古開発で唐代風デザインの観光サービス施設が立ち並ぶ予定である。

スラムクリアランスの通告は2005年5月30日付けで発せられ³、翌日から撤去業務が始まった。2005年夏の現地調査では、通告に示された正殿前広場と御道の整備に伴う撤去範囲に留まらず、より広範な地域でクリアランスが行われている実態を観察できた。撤去対象地域では「早搬遷 早安置 早受益（早く引っ越し 早く落ち着き 早く利益を受けよう）」と書かれた横断幕が随所に垂れ下がり、撤去に関する「通告」が電信柱に張り出されていた（写真12参照）。通告が出された日付は2005年7月14日。通告の内容は、各家屋所有者は身分証と家屋所有権証を持って、2005年7月14日から18日までに、西安市新城区大明宮含元殿御道工程拆遷安置指揮部に赴き、撤去安置協議にサインするように、という一方的なものであった。城隍廟周辺のスラムクリアランスでも状況は同じであり、中国では、この類の撤去通告はある日突然張り出され、極めて短い猶予期間のもと撤去が始まり、撤去すること自体を問う異議申し立ては基本的に受け付けられない。なお、家屋撤去に際する補償対象となるのは、あくまでも家屋所有者であり、間借りしている借家人は考慮されない。実際の補償も、金銭補償の場合は、地域や土地用途に応じて補償額の計算式が予め決められ、代替地補償の場合も、立ち退き先として提供される代替地とその面積などが予め決められていて、条件闘争するにしてもその幅は極めて狭められているのが現状である。市街地再開発に伴う撤去では、土地所有権の実勢価格が高騰するなか、被撤去者が補償額や代替地に不満を抱くケースが少なからず存在し、西安においても、もめごとや暴力事件に発展することも少なくない。

² 2005年8月8日付けの情報「大明宮含元殿御道建設項目拆迁工程进展顺利」、西安市政府ホームページ（<http://www.xa.gov.cn/>）より。

³ 2005年5月30日「西安市人民政府关于大明宮含元殿御道保护及周边环境改造拆迁工作的通告：市政告字〔2005〕9号」、西安市政府ホームページより。

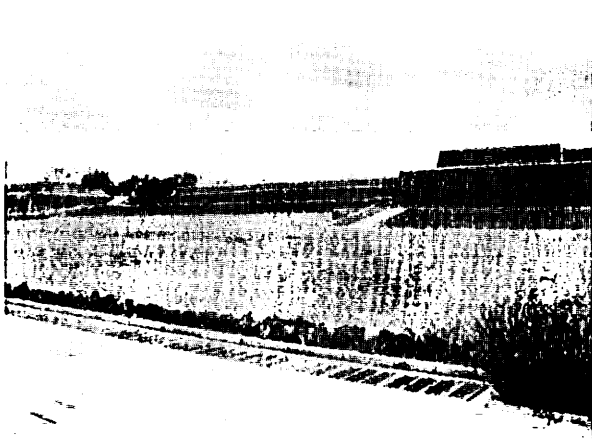


写真 11 含元殿の基壇



写真 12 撤去地域の横断幕

(2) 漢長安城遺跡・阿房宮遺跡について

明清期の城壁が保護・修復される一方で、その外側の北東に位置する西漢王朝の都城跡・漢長安城遺跡は、ほとんど保護管理がなされていない。漢長安城の城壁跡は広範囲にわたり点在しているが、城跡内は人口5万人を超える農村生活圏になっており、住民の日常生活のなかで侵食が進んでいる。1994年から西安市政府内に漢長安城遺跡保管所が設置され、遺跡の管理を行ってきているが、農村集落の近代化や農地や居住地域の拡大により、違法な建築や土地利用の改変が後を絶たない。「漢長安城遺跡保護総体計画」が制定され、違法建築の取り締まり強化も盛り込まれてはいるが、現在のところ実効性は無いとのことである。漢長安城国家遺跡公園の建設が本格的に動き出すと、含元殿周辺と同様、違法建築群の撤去が一挙に進むものと予想され、それまでは放置しておくようである。

漢長安城遺跡の核心部のひとつである未央宮前殿は、1961年に全国重点文物保護単位に指定されているが、観光シーズンであっても訪れる観光客はほとんどいない(写真13参照、第1図H地点)。未央宮前殿は基壇部分が小高い丘のように残っているだけで、含元殿のような保護修復事業はまだ着手されていない。中国の国内観光客は、観光行動がまだ成熟しておらず、このようにスペクタクル化されていない単なる遺跡を好まないのが現状である。文化財保護法の規定により文化財周辺には家屋が建設できないため、未央宮前殿周辺は全く宅地開発されていないが、農地は直ぐ近くまで迫っている。

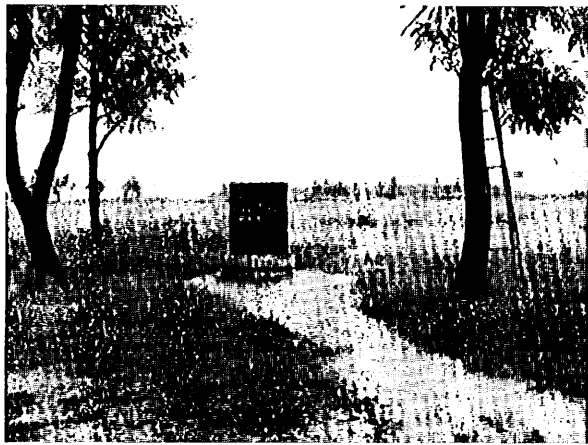


写真 13 未央宮前殿



写真 14 阿房宮遺跡

秦の始皇帝が造営し項羽に焼き払われた阿房宮の物語は、中国国民の知名度が高く人気も高いもののひとつである。その阿房宮遺跡は西安城外の西側に位置しており、東西約 1,300 メートル、南北 500 メートルにわたり、高さ数メートルほどの土台跡のみが残っている（写真 14 参照，第 1 図 I 地点）。道路で分断されている阿房宮遺跡は、農村住民たちの生活空間のなかに取り込まれ、農村住民の生活の痕跡が色濃く刻み込まれている。例えば、阿房宮遺跡の土台部分には、付近の農民が穴を掘り 1970 年代まで住んでいた跡が残り（写真 15 参照）、全国重点文物保护单位を示す碑文の近くは、周辺農民の生活ゴミの捨て場となり、土台部分の上には畑だけでなく集落も広がり、カラオケやディスコなども営業されている状況にある。西安市秦阿房宮遺跡保管所が阿房宮遺跡の保護管理を担うことになっているが、マンパワーも資金も無いため、事実上の野放し状態にあると言える。漢長安城遺跡と同様、阿房宮遺跡を訪問する観光客もほとんど見かけなかった。

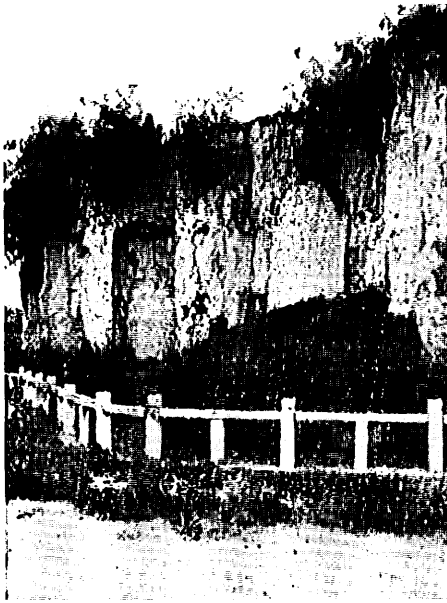


写真 15 阿房宮の穴居跡

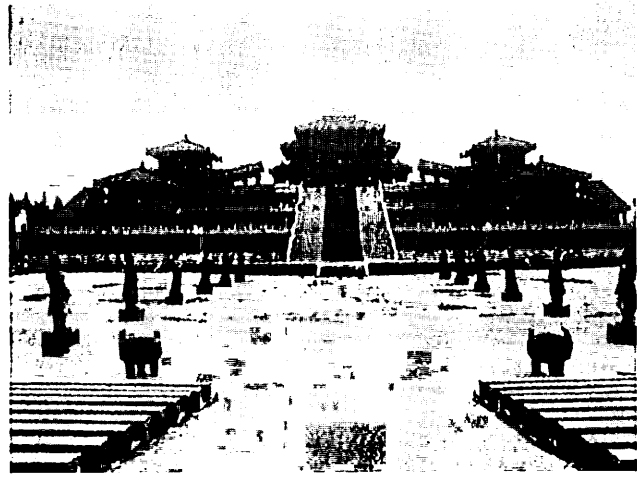


写真 16 テーマパーク『阿房宮』

阿房宮遺跡の一角は、驚くべきことに、中国語で主題公園と呼ばれるテーマパーク『阿房宮』として観光開発されている（写真 16 参照）。この『阿房宮』は、陝西秦阿房宮旅游発展股份有限公司が開発したものであり、2000年9月に開業して内外からの観光客を受け入れてきた。1.3億元の投資で建設された『阿房宮』は、建築総面積6.4万平方メートルに始皇帝が造営した阿房宮を再現したと宣伝され、隣接する温泉施設とホテルも同会社が経営している。この『阿房宮』が建設される前、その敷地では郷鎮企業のレンガ工場が操業し、阿房宮遺跡の土台部分から原料を得ていたという。同会社は、レンガ工場が遺跡を破壊するよりも、テーマパーク『阿房宮』を建設する方が、文物の科学利用や阿房宮遺跡の保護にもつながり、地元政府にも税収面で貢献できるとの主張を展開し、地元政府の認可を得て観光開発を行ってきた。なお同会社は2005年4月にアメリカのナスダック株式市場に上場して新たな資金を得て、2006年に向けて『阿房宮』への投資を拡大する姿勢を打ち出している。しかしながら、現地での観察では、開業してわずか5年余りで、施設の老朽化が見受けられた。また、海外のガイドブックや西安市以上のレベルで運営される公的な観光情報サイトでも紹介されておらず、ここを訪れる観光客は少ない。本物の遺跡の上に再現されたテーマパークは、近い将来、遺跡を破壊した劣悪な観光ストックと評価される可能性が極めて高い。

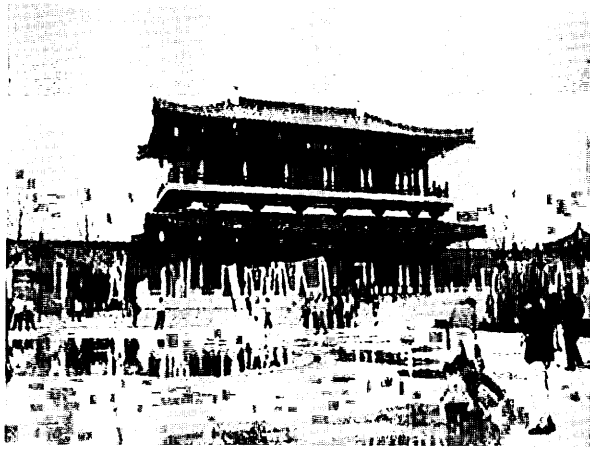


写真 17 大唐芙蓉園の外観

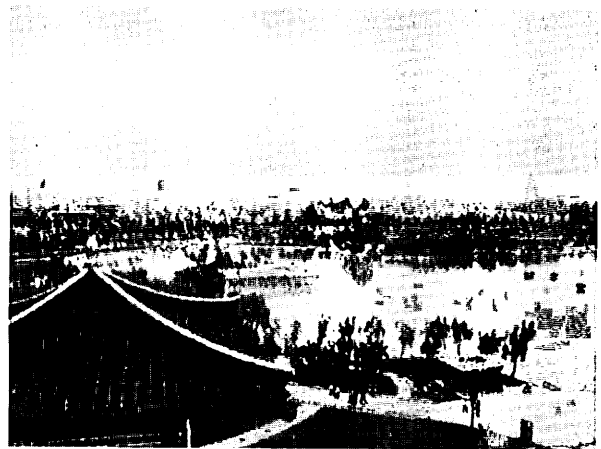


写真 18 大雁塔を望む

(3) 大唐芙蓉園と大雁塔北広場

西安城外の南東，大雁塔を含めた広範な地域は，曲江旅游度假開発区に画定され，様々な観光娯楽施設が建設されている。2005年4月、『大唐芙蓉園』という新たなテーマパークがここで開業した。13億元の投資で2年かけて西安大唐芙蓉園旅游發展有限公司が建設した『大唐芙蓉園』は，唐代文化を展示する庭園型テーマパークであり，「国内第一個全方位展示盛唐風貌的大型皇家園林式文化主題公園」と宣伝されている（写真17参照，第1図J地点）。2005年夏の現地調査では，入場料が50元と少々高めであるにもかかわらず，陝西省内からの客を中心に賑わっていた。西安市街地の各所で，大唐芙蓉園の夏季休暇中イベントを宣伝するポスターが貼ってあるのを見かけた。1980年代の大雁塔周辺は農村地帯であり，農村景観と大雁塔が調和していたが，2005年現在，大雁塔周辺の景観は大きく変容している。大唐芙蓉園から大雁塔を望むと，バブル経済の香りが漂う高級別荘街の向こうに大雁塔が見え，大雁塔の後景には近代的な高層ビルディングが立ち並んでおり，まさに現代の西安を象徴するような景観となっている（写真18参照）。大雁塔南側の雁塔南路沿いに広大な空き地があるが，ここにも近々，倣古開発で唐代風にデザインされた巨大な観光アトラクションが建設される予定とのことであった。

大雁塔の隣接地域でも観光開発が行われている。2004年元旦から西安市民や観光客に開放された大雁塔北広場は，5億元の投資を費やして，南北300メートル，東西450メートルにおよぶ広大な空間に，商業施設と大規模な噴水が建設された（写真19参照，第1図K地点）。大雁塔の西側には倣古開発で「大唐通易坊」という土産物売る街路が整備されたが，その様は不自然な映画セットを思い起こさせる（写真20参照）。

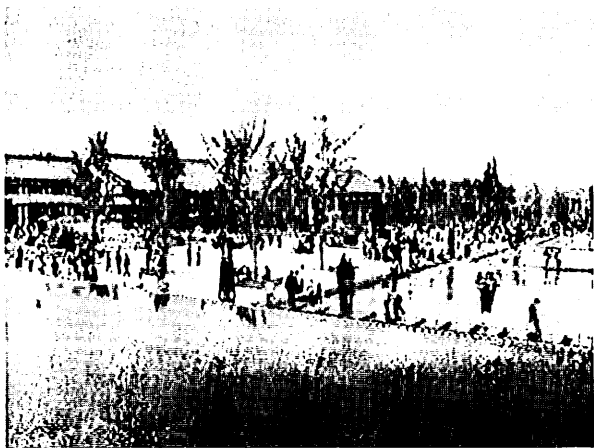


写真 19 大雁塔北広場



写真 20 大唐通易坊

5. おわりにかえて

ここまで古都・西安で生起している観光開発と空間変容の諸相を紹介してきた。端的にまとめるならば、古都・西安では、観光というキーワードに資本の論理が絡まり、とりわけ短時間でわかり易く理解できる観光アトラクションを求めがちなマスツーリズムのまなざしのもとで、中国国民が持つ古都・西安イメージに合致する空間が創出されつつある。それは歴史文化を核とした都市自体のテーマパーク化ともいえる現象であった。中国では「文化」を資源と見なしてその内容を「開発」という考え方が、行政側にも国民意識のなかでも、大きな抵抗無く受け入れられている。歴史文化に対するオーセンティシティ問題に関しても、歴史研究者や景観保全論者のなかには痛烈な批判を展開するものもいるが、日本と比較するならばおおらかに対処しており、少なくとも資本の論理においては、歴史文化を保護するというよりも、それらに配慮しながら積極的に創造する傾向が露骨に伺える。総じて、現代中国には倣古開発を広く受け入れる土壌が形成されているといえる。

しかしながら、観光開発のもとで都市の空間的リストラクチャリングが急速に進むなか、都市住民が身体性で持って認識している生活空間は、突然通告される立ち退きの脅威にさらされている。映画のセットのような、古色蒼然とした新しい街並みが、来訪者のまなざしを強く意識して創造されてゆくなかで、立ち退きにあった当事者としての住民たちがそこに愛着を見出せるような仕組みが構築できるのか否かが、今後の中国の課題となろう。